
【midnight//exception】

大輔(だーすけ)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【midnight / exception】

【Nコード】

N4294Q

【作者名】

だいすけ
大輔

【あらすじ】

吸血鬼の少年と、座敷童の少年。交じり合っはすのない世界にいる二人の恋愛ファンタジー。

【midnight / contract】

「俺、本当は……本当は吸血鬼なんだ。信じなくても、いいけど。」

俺は腹を括った。オマエに嫌われたくないけど、嘘を突き通すのも嫌だって。

【ミッドナイト・コントラクト】

彼はふっと笑って言った。

「アンタ、真面目な顔して何言い出すかと思ったら……そんなことかい。おれは知ってたよ。」

俺は初め、その言葉の意味を掴めなかった。

「え？」

「言わなくてごめんね？でも俺も同じようなもんだ、座敷童っての。何故か知らないけど自由になれちゃってな。」

人間みたいでしょ？

そう言ってくるっと回ってみせる彼を見た。確かに年の割りには幼い。

「座敷童はな、いつでも悲しくて寂しがる子のところに居んの。役目が終わったら、さよならなんやけどね。」

「え？」

本日二度目の台詞。それに再び笑うと続きを言った。

「おれも遠くから来たしなあ。ま、帰る家なんて無いからええんやけど。兵庫やで？」

どうやって来たのかは聞かないが、本当の苦笑を浮かべているのを見て、苦勞したんだと思った。

「帰る家が無いって？」

「こないだ暫く休んでたやんか。その時に一旦帰ってみたんやけど、無くなつてな。……ああ、きつとおれが居らんから御利益薄くなつてもうたんやな、ってちよつとだけ後悔した。」

俺は眉を八の字にした彼の頭を撫でた。

「それでも俺の側に居てくれたんだろ？ありがとう」

「そう、それや。おれは、というかおれたち座敷童は幸せとか笑顔が見たいねん。」

アンタが吸血鬼だって知ってた、せやからもつとアンタの力に成りたかった。アンタは財産も権力も欲しがってない。寂しさを、人間ではないという事実からきた心の寂しさを埋める相手が欲しかったんやろ？おれが幾らでもなつたるよ。」

つ、と涙が零れた。強く生きていくと誓った。それ以来流してない涙を、彼はいとも簡単に流してみせた。

「おれも、どこに居っても一人やから寂しかつてん。家に居ったら人はよう来るけどな、ちらほらとしか会話出来ひん。」

「俺も。吸血鬼だからって別に夜しか行動出来ないわけじゃない。」

血が流れてるっただけだから。でも吸血鬼と同じで血が欲しいと思うときもある。その矛盾が苦しい。吸血鬼でも人間でもない俺って一体なんだろうって。」

辺りは暗い。けれどもはつきりと彼の顔は見えた。芯の強くて、真っ直ぐな目。そして優しい表情。確かに、ずっと側に居てくれたらと思う。

「アンタはアンタですよ。それ以外の何者でもない。」

眩しいくらいだ。きっと本当の吸血鬼は彼を見たら灰に変わってしまっただろう。太陽と同じくらい、明るいのだ。だけど、明るいのがいまいち苦手な俺が彼に救われたのも事実。

「ありがとう。やっぱりオマエが居ればいいや。」

「座敷童は大人には見えへんよ？」

「俺は例外。」

「おれはアンタの眼球舐める。んでアンタはおれの血を吸う。これと一緒に居れません？」

彼は小首を傾げて尋ねてきた。俺は目を見開く。

この妖怪は何を言い出すかと思えば……

「いいの？生涯の、伴侶だよ？」

「ええよ。アンタの傍に居るって、それがおれの役目やもん。」

俺は彼の白い首筋を見た。彼は軽く服を緩ませる。心が――吸血鬼の血が騒ぐのが分かる。人外の血は美味しいのだろうか。甘い匂いのする首筋に、そっと牙を立てた。

「っ……」

喉を唸らせて飲む。甘い甘い彼の血。座敷童にも血が通うのだと思い、心の中で笑いながら啜った。

「座敷童やから失血死もせんから、安心しい？」

「甘くて美味しかったよ。」

「んじゃおれの番な。」

少しだけ強張ったものの、意外とすんなり舐められて終わる。その瞬間、彼が更に鮮明に輝いて見えた気がした。

「おれとアンタとの契約。西洋じゃないからほんまは契約とかそういう概念ちゃうんやけど」

「俺とオマエとの契約。俺はもうオマエに捕らわれたままだし、オマエも俺に捕らわれたままだ。」

「どっちも人外やけどな。」

「関係ない」

せやね。

優しく微笑んだ彼は大人しく俺に抱き締められた。

「好きだよ。」

「おん。」

君の御利益が俺にあれ。

【midnight / imitation】

ハンターの気配。

俺は黒いマントを靡かせて走った。

【ミッドナイト・イミテーション】

俺は中途半端な吸血鬼の血筋だから、気配が弱い。無論ハンターも気づいているはずだ。基本そんな吸血鬼はそこらにゴロゴロいるから放置される。狩られることは滅多にない、血をあまり必要としないから。

吸血鬼は死ぬまで血を飲み干すとか、飲んだら吸血鬼になるとか、そんなことは絶対にない。ちょっとだけ貰う、謂わば蚊のような存在なのだ。誤った我々のイメージはただ人間が作り出した幻想。

しかしハンターがいるくらいだ、確かに人を殺してしまう吸血鬼もいる。そいつらは例外とでも言おうか、狂った吸血鬼なのだ。たまに味の悪い血を飲むか、暫く血を飲まないと反動で可笑しくなってしまうらしい。

俺は見たことないのだが。

ある座敷童からしか血を貰っていない俺は追いかけられる覚えがない。ということは、近くにそんな吸血鬼が居たんだろう。果たして今もこの周辺にいるかは知らないけど。

「吸血鬼だな……」

見つかった。有無を言わさない鋭い瞳の持ち主だ。だが、きっと八

ンターになったばかりのひよっこ。こんな夜にこんな深く追い掛けるなんて腕利きのハンターがすることじゃない。

なんで夜以外も行動出来、他者からの血の補給も必要としない俺が夜に吸血鬼特有の姿で出歩いているか。先程の狂った吸血鬼を探すためだ。いなかったらいなかったで他の縄張りに行ったのだと思って諦め、他に任せる。いたら、殺すまでだ。

「ハンターか。ひよこひよこ来て良いのか？」

ハンターに声を掛ける。すると何も言わず飛びかかってきた。

「危ないぞ」

「煩い、いくら同い年くらいの吸血鬼だからって容赦はしない！」

ナイフで斬りつけてくる。俺は微かに溜め息をつきながら交わし続けた。

「お前も反撃したらどうなんだ？」

肩で息をしながらハンターは言った。俺は薄ら笑いを浮かべて応える。

「反撃して欲しいか？俺はお前と戦うつもりは無いんだけどな。」

「ふざけるな、余裕ぶって、」

「俺はお前の狙う獲物じゃない。俺は一人からしか血を受け取らない。」

「そんなこと聞くか！」

「師匠から聞いてないのか、吸血鬼の習性を。」

知らない、とハンターは吠えた。流石にしつこい。どうやって切り

抜けようか考えあぐねていると、空気が急に乾いて冷たくなった。からん、からん。と下駄の音がする。

「何なんだ、」

ハンターの表情は青ざめ、強張っている。俺まで背筋が凍るようだった。

汗が伝う。

「そこのお兄ちゃん、あんまりしつこいとおれ力づくで散らせるよ？」

林の中で四方八方から声が響き渡る。この声は紛れもなく座敷童の彼のもの。

ハンターは肩を揺らし、ナイフをぎゅっと握りしめた。

「誰だお前つ……」

「誰って？座敷童。」

ふわりと姿が見える。少し短めの着物に下駄、微かに紫掛かった着物はより一層人外らしさを醸し出していた。

「座敷童!？」

「うん。皆勘違いしてるけど、おれたち幸せを運ぶだけじゃないで？」

幼さを残した笑みで言う。本格的にハンターは怖がっているようだ。やっぱりまだまだなあ。なんて笑いながら彼に目配せする。

彼もこちらを見て僅かに頷いてみせ、それを合図に俺は飛び出した。ハンターの首に手刀で一撃お見舞いすれば、男は崩れ落ちる。彼は

それを抱えあげ、言った。

「ちょっとその辺に置いてくるわ。」

「ここにいる。」

「おん。」

彼はすつと消えた。俺の足元にはハンターが落としていったナイフがあつた。拾い上げてみる。

刃の側面の傷を見て、思わず俺はナイフを落とした。

「なんで……」

そこには、座敷童の――彼の名前が書いてあつた。

【midnight / abstraction】

懐かしい顔にそつと指を這わせる。

「ごめんな、本当はキミと一緒に居るつもりやったのに。」

【ミッドナイト・アブストラクション】

おれは林の入り口にハンターをゆっくり下ろした。
見慣れた姿は多少成長したくらいじゃ見間違えるはずもない。

「久しぶりやな。約束破つてごめんな、でもおれ座敷童やから、一緒に居れんかってん。」

髪を梳き、頭を撫でる。久々なこの感触に少しだけ喜びを覚えた。
きっと今頃おれの夢を見ている。でも夢で終わってしまうから。せめておれは現実だって刻みつけたかった。

「ごめんな、二人とも守りたいから。二人とも大切だから。」

どちらも殺させたくなかった。大好きな二人が一瞬でも敵同士になつていがみ合うなんて誰が考えるだろう？

「おれが傍に居たら、キミの両親は殺されずに済んだやろか？」

涙がぼたぼた伝う。

おれはハンターの持っていたナイフを探す。しかし見つからなかつ

た。

「まさか、落としてきた？」

もし拾っていて、眺めていたらおれのあげたナイフだと分かってしまふ。昔の話だから、隠すようなことでもないのだが、吸血鬼を殺せるナイフをあげたなど……

「あないな昔のナイフ、持ってくれたのは嬉しい。でもそれで、おれの大切な人を攻撃せんでや。おれ自身が傷付けてるようで嫌や。」

ハンターに落ちていく涙の粒を掬い、おれは立ち上がった。彼の元へ戻るために。

「遅なつた……」

行つた瞬間、抱き締められる。苦しいくらいに強く。おれは彼に心配をかけてしまったのだと気付いた。

「帰つてこないかと思つたろ。昔の大切な人を選ぶんじゃないかって、気が気でなかった。」

「おれは昔のことは引き摺らんよ。確かに大切だった、だからあんなナイフあげた。でもそれでアンタが攻撃されるなんて思つて無かつた！」

涙はまだ止まらない。彼は優しく背中を叩いてくれた。

「俺は無事だし、オマエは帰ってきたし、もう大丈夫だ。な？」

「ごめんな」

「いいんだって。ナイフどうする?」

「貸して?」

おれは手渡されたナイフの、自分の名前の書いてある場所に口づけた。綺麗に、元々かのように何も無くなる。

「良いのか?」

心配そうに見てくる彼に微笑んだ。

「おん。もう一度置いてくる。今度は吸血鬼を殺すためじゃない、あの子自身を守るナイフをあげる。」

「いつてらっしゃい」

「いつてきます」

おれは彼の横にナイフを置くと、一度だけ笑ってさよならを告げた。もう二度と会うことがないように。その時はおれは吸血鬼側になつてしまうからと。

「ありがとう、キミと過ごした時間は宝物やから。」

結局彼によると狂った吸血鬼はこの地域から去っていたらしい。だが聞いたところによると、直ぐ隣の街の吸血鬼がそいつを捉えたそうだ。

その知らせを聞いた彼は笑って言った。

「—安心だね。」

「暫くは安心やろな。」

「しょっちゅう狂われても困るからな」

明るく蒼い空の下で、手を繋いで誓った。おれはアンタを守ると。

【midnight / bloodyray】

真夜中に飛び起きた。

【ミッドナイト・ブラッドレイ】

真夜中に飛び起きると、俺の目は燃えるように熱かった。一年前にとある座敷童と契約を交わした目だ。

「っ……?!」

目や体は熱いのに、周辺は冷たくなっていて。座敷童に何かあったのだろうか。俺はふと外を見た。

「おい、アンタ。」

声のする方を見ても、誰もいない。視線を下にずらせば黒猫がこちらを見ていた。多分そいつが言ったのだろう。

「何なんだ？」

「オマエは…その目、どうしたんだ？真っ赤だぞ。」

眉に皺を寄せて??いるように思える??俺を見る。コトン、と床に置いたのは鏡。

嫌な予感が背中を伝った。

「これは一体何だっていうんだ。」

「身に覚えがあんだろ？」

覚えなどありすぎる。俺は黒猫を一瞥して、コートを着た。出来るだけ吸血鬼の気配を消し、且つその力をすぐ使えるようにする。

「オイも行く。オイはオマエら一族に使える動物だからな。」
クリーチャー

危機なんだろう？と意味ありげに見る猫に、ニヤリと笑った。

景色が後ろに流れていく。俺のスピードについて来る黒猫は、確かに吸血鬼に縁があるらしい。

あてはない。たまに猫が不安げに見てくるが、俺はただ飛んでいた。未だに目は疼くし、赤いらしい。

「どこに居るんだよ……」

舌打ちして探していく。右目が微かに行き先を示す。残り香を辿る。急に開けた視界に映るのは、

??真紅の月。

下には、小さい影。赤い光が反射した着物姿に目を見張った。

「??、」

静かすぎる世界に、俺の彼を呼ぶ声が漂う。

くるりと振り向くと、酷く歪んだ、けれど異様に綺麗な顔がこちらを見た。

「あ、何で来てん???」

静かなのに、途切れそうなか細い声が届く。彼は泣きそうになって、下を向いた。俺が一步踏み出せば、彼は一步後ずさった。

「逃げるなって。」

「来んな、」

怯えている顔でこちらを見る。

「どうしたんだよ?」

「来んなや、お願いだからおれに近寄らんといて、」

「何でだよ!」

俺は大声で叫んだ。空気がピリピリとする。この前のハンター事件のように、彼からは微かに殺気が感じられる。

「もうアンタには会えへん。今近付いたら殺されてしまつ。仲間や、ザシキワラシ式神に狙われる!」

「そんなん、嫌やんか……」

「オマエなあ……どっちにしろ死ぬなら、一緒に居た方が良くないか?俺はオマエの血以外吸えないんだ??」

「出来るよ。」

え?と俺が返せば、悲しそうに笑った。悲しいなら、止めればいいのに。

「出来る。おれが、契約を白紙に戻せばいい。アンタの中から”おれ”という存在が消えれば、アンタの契約も破棄される。右目、熱いやろ？痛いやろ？もう少しで終わるからな。」

ニツコリと笑った彼が一瞬透けた。彼を失う？そう考えると怖くて仕方なかった。

「ダメだ、やめろっ！」

その叫びに応じて吸血鬼の力が解放される。真紅の月が一層輝きを増して。

「???おれのことは、忘れ？」

声は聞こえないのに。それなのに言っていることは全て分かる。手を伸ばしても、飛んでいても届かない姿。ただ耳の奥で、下駄と鈴の音だけが響いていた。

「おいっ！」

聞き慣れない黒猫の声。気が付けば、俺は殺気に囲まれていた。遠くで微かに、澄んだ声が言う。

「何でや、約束とちゃうやんか！忘れさせたら、狙わないって言うたやろ、」

「旦那様、吸血鬼???しかも半血のような者と貴方は不釣り合いでございます。さあ、お屋敷へ帰りましょう。」

「式神、お前たちはこのおれを騙すと言っくんか？どうなるかわかって……」

「お帰りになられたら、破り裂いてもらっても構いません。」

「あいつに手を出したら、今この場でやったる。」

「雷式神、やめておけ、」

突然の雷撃に慌てつつ回避する。その時、目蓋の裏に神々しく佇む彼と、切り刻まれた式神の残骸が映った。

「申し訳ございません、旦那様。さあ、お前たちも帰るぞ。」

長らしき者が言うと、殺気が消える。

「ごめんね??、大好きだったよ。」

愛しい彼の気配が、赤い光に溶けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4294q/>

【midnight//exception】

2011年10月8日01時14分発行